

子孝行とシルバー民主主義

わが国の少子化対策は、「異次元」という言葉をつけ加え、大胆な政策を打ち出す方針である。少子化は日本だけではない。韓国の合計特殊出生率(女性が生涯に出産する子どもの数)は0.78とはるかに低位にあり、中国のそれは1.3と日本とほぼ同水準にある。このような低出生率の国からなる東アジアは2022年(昨年)から人口減少地域になった。

東南アジアでも出生率が低い国がある。

たとえば、タイのそれは1.3と低水準にある。しかし、驚くことにタイの経済社会開発計画のなかに少子化対策(出生率の引き上げ)が見当たらない。出生率を1.8に維持するという数値目標を掲げていた時期もあったが、現在はそんな数値目標さえない。もちろん子育て支援はある。子どもへの教育・衛生サービスの拡充は最重要課題としている。ただ、その結果としての出生率の引き上げ目標が示されていないのである。考えてみればとうぜん、タイではまだ教育・衛生サービスを十分に受けていない子どもが少なくない。政府は、少子化による人口減少・生産年齢人口の減少には、労働力の質の向上で対応していくとしている。まっとうだ。

タイでは今後高齢化が加速する。そのなかで「子どものいない高齢化」が問題視されている。タイの高齢化の実態は、日本を含めた先進国とは大きく異なる。たとえば、先進国の高齢者は、個人に蓄えがあるし、年金制度も完備されている。しかし、タイの高齢者には蓄えが十分でなく、年金制度も未整備だ。そして子どももいない。

タイの子どものない高齢者は、孤独で、その精神的ダメージは大きい。これに対する高齢者政策に、出生率の引き上げは助けにならないのだ。家族を当てにできない。政府の出番であり、友達・近所の助け合いが重要だとタイの人はいうのだ。

こうして考えると、タイに比べれば先進国の高齢者は幸せである。そうならば、高齢者も少子化社会に貢献すべきだと思う。大阪商人に伝わる言葉に「子孝行」があるそうだ。これは親が子どもに資産を残すことをいい、逆に子どもに負債や難儀を残すこと場合は「子不孝」というそうだ。未来世代の借金を増やしていないか。平和を受け渡す準備ができていないか。地球資源を大切に使っているか。子不孝になっていないか。自信がなくなってきた。

シルバー民主主義という言葉がある。「高齢者人口が多い民主主義の国では、高齢者に利する政策が優先させる」ことを指すらしい。しかし若い世代が見落としがちな長期的視点を、高齢者が呈示できる社会が豊かな高齢社会ではないのか。シルバー民主主義の定義を変えるべきかもしれない。

少子化でも揺るがない経済社会のあり方を高齢者も一緒になって考えるべきかと思う。そんな社会を実現できたとき、出生率は自然と改善するのではなからうか。「急がば回れ」である。社会のあり方は、子育て世代でない者の行いにも大きくかかわるのだ。

そう思い、私の机の前に「子孝行」と「孫孝行」と書いて貼ることにした。

(アジア研究所教授・大泉啓一郎)



* 研究所だより *

アジア研究所は、毎年一つのテーマを掘り下げた公開講座を主催しています。本年は、6月24日から7月22日までの土曜日5週連続して「東南アジア政治のいま～多様性のなかの変化～」をオンラインにて行いました。第1回は本学アジア研究所大泉啓一郎先生が「なぜ今、東南アジアの政治なのか」、第2回は京都大学東南アジア地域研究研究所中西嘉宏先生が「混迷のミャンマーに希望はあるのか」、

第3回は本学国際関係学部増原綾子先生が「インドネシアにおける民主主義と権威主義の共存」、第4回は日本貿易機構・アジア経済研究所動向分析研究グループ青木まき先生が「転換点に立つタイ政治」、第5回は中国・アセアン専門ジャーナリスト舛友雄大先生が「見えざる中国の南進」について講演を行いました。

次回所報では、その概略を特集いたします。ご期待ください。